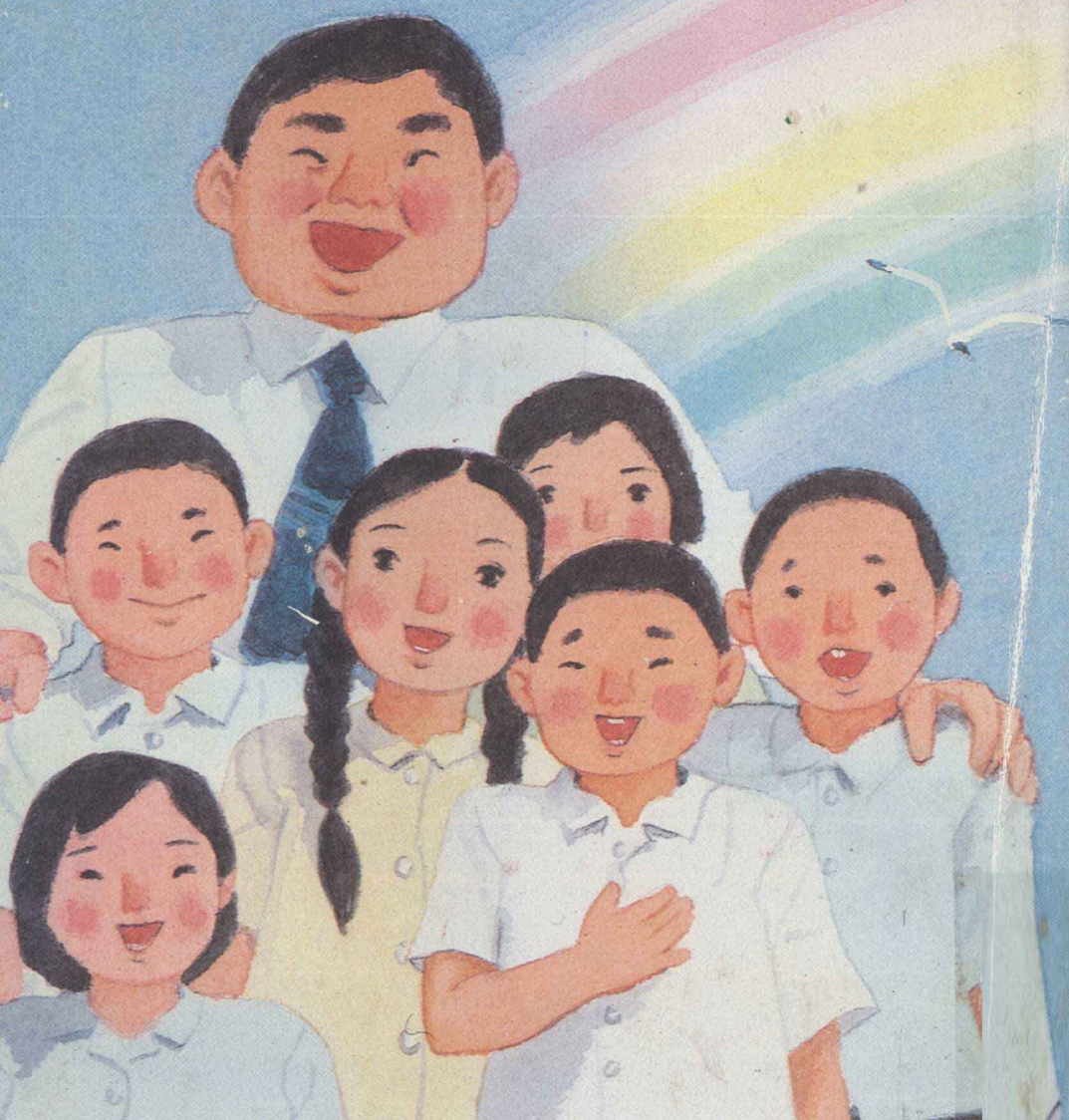


とら先生と海のにじ

岡本文良 作 小泉澄夫 絵



N.D.C. 913 とら先生と海のにじ

岡本文良・作

小泉澄夫・絵

旺文社 1982

144p. 22cm

(旺文社創作児童文学)

小学中級以上

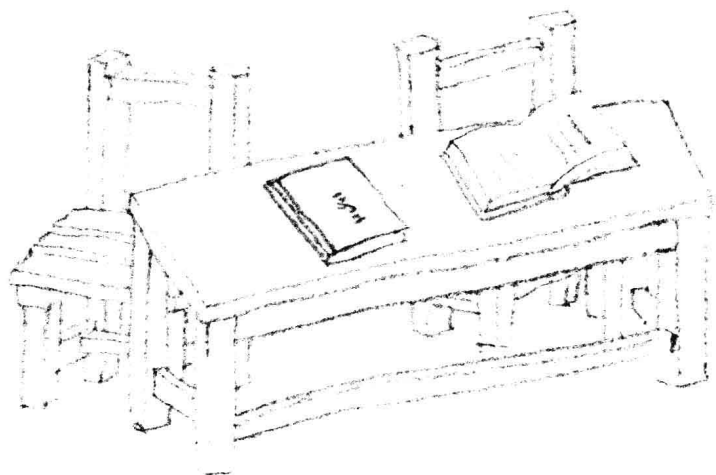
岡本文良(おかもと ぶんりょう)

1930年、茨城県に生まれる。東京大学文学部卒業後、編集者生活を経て、文筆活動にはいる。主な著書に「なにかがおこった日」、「冠島のオオミズナキドリ」(第1回ジュニアノンフィクション文学賞受賞)、「ころんでも夢は大きく」、「秋子のゆくところ」、「シャカと天女と神の国」、「ばらの心は海をわたった」、「なるほどねイソップさん」、「一休」など。

小泉澄夫(こいずみ すみお)

1942年、横浜に生まれる。少年時代を群馬県で過ごす。民間会社を退職後、小説のさし絵、広告・雑誌・参考書のイラストなどの仕事を始める。第39回新制作協会展、第12回現代日本美術展などに入選。主な作品に、「くものライオンもこもこ」「夏祭り」などがある。

おへん





- 一. 海をわたって…………… 7
- 二. 冷つめたい目…………… 16
- 三. 村の学校…………… 25
- 四. こわくなくて、
こわい先生…………… 34
- 五. とけはじめた心…………… 45
- 六. たよりにされる人…………… 54
- 七. どくへびと薬草やくそう…………… 65



- 八．夕日の中の顔……………76
- 九．「タイペイへ？」……………85
- 十．新しい道……………94
- 十一．時計とすし……………103
- 十二．別わかれの時……………115
- 十三．月日は流ながれて……………122
- 十四．にじの橋……………130



- 八．夕日の中の顔……………76
- 九．「タイペイへ？」……………85
- 十．新しい道……………94
- 十一．時計とすし……………103
- 十二．別わかれの時……………115
- 十三．月日は流ながれて……………122
- 十四．にじの橋……………130



さし絵・小泉澄夫

一．海をわたって

ボーツ、ボボーツ——！

船が、汽笛を鳴らして、神戸港の岸へきをはなれ出しました。

見送りの人のかげがみるみる小さくなり、赤、黄、青、むらさき、白……と、色とりどりのテープがのびていきました。

切れたテープが、海に落ちました。

「さようならあーっ、お元気でねえーっ。」

「ありがとうーっ、みんなもねえーっ。」

せいっぱいのさけび声も、汽笛やエンジンの音やかもめの鳴き声などに

さえぎられて、とどかなくなっていきました。

はなれるにしたがつて、大小の船のうかぶ港と、人や乗物の動く町の様子とが、美しい一まいの絵のように写ってきました。空がすんでいて、町のうしろには、青い山々もくつきり見えます。

たくさんの船客が、テープが切れてしまっても、その切れはしをにぎったまま、しだいに遠のいていくけしきをながめていました。

「しばらく、お別れだなあ。」

とら先生が言いました。

そばに、ねんねこで赤ちゃんをおんぶしたおくさんが立っていました。おくさんは、さびしそうな顔になっていました。

「どうした？ 心細くなったのかね？」

とら先生が、わらってたずねました。するとおくさんも、思い返したように笑顔を向けました。

「ううん、あなたといっしょですもの。」

ふたりは、船のおなかの中にもぐりこんで、船室にはいりました。

船は、陸地に近いところを走り続けていました。まんまるい船のまどから、青と緑のなごやかな風景がずっと見えました。

先生たちのふるさとの四国は、反対側になっいて見えません。

夜になると、あかりが点々と見えるけしきに変わりました。船は、その中を、ゴウゴウという音をひびかせて走って行きました。

朝早く、別の港に着いて、またお客を乗せました。

「さようなら。」

「お元気で。」

そう言い合つて、そこでも、大ぜいの人たちが別れをおしみました。

船は、その港を出ると、南に向かいました。今度は、陸地から遠くはなれたところを走り出しました。スピードも、それまで以上に出して走り出しました。

まもなく、陸地が見えなくなりました。青い空と青い海のとけあう遠い遠いところが、一本の直線につながつて、ぐるりと船の周りを回っていました。

春の日が、いつのまにか、強く、まぶしくなつた感じでした。

「あの水平線の向こうに、わたしたちの行く台湾があるのね。」

かんぱんに出ると、赤ちゃんをだっこしたおくさんが、とら先生に言いました。その顔には、港を出た時のさびしきは、もうありませんでした。目が、



水平線を見ながら、きらきらと光っていました。

「うん、そうじゃ。」

「どんなところでしようね？」

「そうじゃなあ？」

そう言って、とら先生も、水平線に目をやりながら考えこみました。

台湾は、中国大陸からころりところげ落ちるようにして、南の海にうかんだ島です。面積は、日本の九州よりやや小さい位です。

台湾は、もともと、中国の領地でした。でも、明治時代に、清といたいた中国が日本と戦争をして負けてからは、日本の領地になっていました。

日本は、台湾の人たちに、日本語を使って、日本の子どもたちと同じよう

な教育きよういくをしました。そのため台湾たいわんには、日本人の子どもたちが行く小学校のほかに、台湾人たいわんじんの子どもたちだけが行く公学校こうがっこうが出来ていました。

とら先生は、その公学校こうがっこうの新しい先生になるために台湾たいわんへ行くところでした。日本がまだ太平洋戦争たいへいようせんそうを始める前まへのことです。

（いったい、どんな子どもたちが待まちっているのじやろう？）

そう思うと、とら先生も、おくさんと同じようにいろいろなことことを考え出かんがしました。

とら先生は、もう何年も、日本の小学校で教えてきました。「とら先生」というのは、その間に、生徒たちにつけられてしまったあだ名あだなでした。

先生は、顔に、太いまゆ、大きな目、大きな鼻はな、大きな口をつけています。

おこると、目をぎよろりと光らせ、かみなりのような大きな声を出します。

「こわくて、とらみたいじゃなあ。」

そのため、「とら先生」というあだ名が生まれたのです。

でも、教えているうちに、生徒たちはひとり残らず、先生をおそれるどころか、心からしたうようになつていききました。とら先生は、それを、うれしい思い出として心の底にもっています。

台湾では、日本人がいばつて、台湾人を見くだしているという話です。それが、公学校の教育のし方にもあらわれているという話です。

そういう話を聞いたため、とら先生は、台湾へ行って、公学校の先生になることを思い立ったのです。

台湾でも、初めのうちは、こわがられるかもしれませぬ。

（しかし、ひとりでも多く、そういう子どもたちの心を開かせるのが、わたしの役目じゃ。）

とら先生は、そう思って、まだ見ぬ公学校の生徒たちをあれこれと想像しました。

ぐるり周りは、まだ水平線です。船は、その上をすべるように、南に向かって走って行きました。夜になっても走って行きました。